九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

序論：福岡市主婦卓球愛好会と「生活卓球」文化の創造

岡，幸江
九州大学大学院人間環境学研究院 ： 教授

https://doi.org/10.15017/7172571

出版情報：社会教育研究紀要. 5, pp.1-7, 2024-02-29. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

社会教育研究紀要 第５号　2024 1-7

【特集】

序論：福岡市主婦卓球愛好会と「生活卓球」文化の創造

Creating a ‘Living Table Tennis’ Culture in the Table Tennis Association of Housewives in Fukuoka City

岡　　幸　江※
Oka Sachie

はじめに

本特集は、この間研究室および授業を通して、2021年より共同議論・検討を重ねてきた福岡市主婦卓球愛好会をめぐる共同研究の成果である。2023年９月の日本社会教育学会第70回研究大会においては、６名の学会員で共同報告を行っている。その後、学会報告でいただいた外部からの反応もふまえて、相互に議論を重ね、今回の原稿に至った。ただし今回の執筆形態としては、共同論文ではなく、各論者の責任において執筆する単独論文集とした。そのためこの序論もまた、共同研究に責任をもつ立場としてこの間の議論をふまえたものでありつつも、各報告との整合性については若干個人差があることはお許しいただきたい。

以上を前提に、今回の共同研究の特徴を、以下２つの視点からのべてみたい。

１　インフォーマル教育論としての視座

まずは社会教育の議論との関係における視点である。

(1) 個人の日常生活からの社会教育動態理解として

１つに本論は、インフォーマル教育的視座から、教育の組織化を描き出すことを試みる。英国のコミュニティワーク・ユースワークの根拠となるインフォーマル教育論[1)]では、予め設定されたカリキュラムに基づく教育に対比させ、日常のなかの対話や関わり、即興的やりとりから教育の内実が生み出される点を強調し、インフォーマル教育と呼ぶ。そこでは、学習課題以上に、学びの関係や場の生成に意識がはらわれる。

この間、教育の組織化としての社会教育をめぐってさまざまな検討が行われてきた。社会教育の組織化を、とくに法制度化に集約して検討した小川利夫、先立って近代学校の成立過程に対比させ社会的な組織化に目を向けていた宮原誠一の理解は代表的である。本論はよりひろく日常生活に目線をむけつつ組織化をとらえようとしている点で、後者の宮原理解の延長上にある。

組織化の議論においては、狭義の社会教育職員にとどまらず幅広い担い手を視野に、動態的な地域社会

※九州大学大学院人間環境学研究院

全体を地域の生涯学習の組織化の基盤ととらえた鈴木敏正もいる。佐藤一子は市民団体が市場における教育文化的な公共的価値を創造する自身の文化協同の議論を、これらの延長上に提示してもいる[2)]。このように社会教育行政や社会教育団体にとどまらず、地域の諸活動や市民活動から社会教育・生涯学習の組織化をめぐる議論はつみかさねられてきている。最近では宮崎隆志のように「日常生活者としての民衆が、暮らしの中から思想を創りあげていく学びの過程を組織する社会教育実践の論理を解明する」[3)]と民衆思想の形成にもつながる地域社会教育をめぐる議論が行われるなど、社会教育の動態的理解は深められてきた。

これらは必ずしも社会教育行政や施設と接点をもつものでなくとも、地域や社会になんらかの学習活動が形成され公共的価値を生み出していく動態に焦点があてられている。本共同研究は、こうした社会にひろがる社会教育組織化の動態へ目線をむけるものである。ただしこの間の議論は、学習者個々人から公共的価値が産み出される道筋を見出そうとするところが強く、その一方で生活者の私的領域そのものにいかに価値が生み出されるのかに迫るには弱さを抱えてきたように思われる。しかし社会における組織や共同性が著しく衰退する一方、消費社会化の進展のなかで人々の間に個人化がすすむ今、個という私的領域から共同性と価値を創造する道筋を見出すことが、社会教育理解においては一層重要になっているように思われる。社会教育の動態に迫るにあたり、組織・集団に基盤をおく議論が展開されるノンフォーマル教育の視点をこえて、個人・生活における関係から教育をたちあげるインフォーマル教育の視点をここで重んじているのはこうした背景がある。

(2) 例えば福岡市の社会教育を描きなおす

具体事例をもとに今回の試みを特徴的に描き出してみよう。本論は福岡市の事例をとりあげるが、福岡市は社会教育の形成をめぐる動態を歴史的にみることができる典型的な自治体の一つである。「福岡市地域公民館職員協議会」(1964) 結成による公民館主事たち自らの集団化・正規職員としての立ち位置の獲得への運動にはじまり、1977年にはじまる市職員のセンター引き上げなど幾多の変遷を経ながら、現在も福岡市社会教育研究会において今なお社会教育形成の息吹を継続している経緯には、少なからぬ研究者たちが注目してきた。

たとえば小林文人が「はげまし学ぶ主事たちの動き―その苦闘と創造と―」(1976)[4)]において、福岡市公民館主事集団を「彼らがおかれていた無権利状態において典型的であるだけでなく、それと闘い、はげまし学びあい、それをのりこえる連帯の集団をつくりだしてきた」一つの典型と位置付けたのはその例であり、そこには彼らの教育労働者性の確立がよみとられている。

同時にそのリーダーの一人であった田岡鎮男の自著三部作[5)]には、その実践と思考の跡とともに、田岡が長くテーマとした「社会教育における学習構造の実践的体系化」の解明が試みられている。福岡市社会教育では、教育労働者性にあわせて、教育専門職性の探求も試みられていたわけである。田岡については、小川利夫も注目し「ある公民館主事の実践の思想と主体形成」(1997) にて正面から論じている。小川はその中で田岡三部作について「地域社会教育の拠点としての公民館実践をとおしての社会教育の目的・内容論であり、行財政論であり、とりわけ公民館主事の性格と役割に収斂している社会教育本質論であるといえよう」とも評している[6)]。

このように基本的に福岡市社会教育は、福岡市地域公民館職員協議会にはじまる「組織」を原動力として、主事の力量が形成されるとともに福岡市社会教育もまた形成されていったという社会教育の動態把握において読み取られてきたといえるだろう。ここでの動態形成のポイントは「組織」あるいはそこから専門性を高め台頭した「職員」である。

しかしここで別の見方を試みてみたい。例えばこの田岡は、本稿が注目する「福岡市主婦卓球愛好会」

の発足と生成に深くかかわった人物でもある。愛好会ではいまも田岡のことが「先生」として語り継がれており、１つの見方からすれば、福岡市社会教育あるいは田岡という傑出した職員あって、愛好会があるということになるだろう。しかし一方、田岡と響きあいながら活動を深めた、自律的な愛好会のリーダー・メンバーたちがいてこそ、愛好会は50年をこえる学びと活動の歴史を地域に刻んできた。また彼女たち一人一人が時代のなかでかかえる生活実態と、愛好会活動を媒介として生成される生き様や暮らしがあり、そうした愛好会メンバーと響き合い学びあいながら愛好会を支えた、卓球指導者・小園江慶二をはじめとする田岡以外の指導者たちの存在もある。

であれば、福岡市社会教育運動があったから愛好会がある、ではなく、愛好会メンバーの暮らしや彼女たちが集い学びあいながら生み出してきた学習文化に第一義的に目をむけ、様々な層の学習文化が織りなす様を通して描かれる、社会教育の動態把握がありうるのではないか。またその場合、愛好会は「社会教育関係団体」でもあるが、社会教育運動や職員、あるいは行政あっての関係団体ではなく、自律的に生活を創造する市民たちがつくりだすハブであり、かつ独自に学習文化を生成する基盤としての関係団体像になるのではないか。ここで生成される学習文化とは、より多様な市民にひらかれた新たな卓球文化であるとともに、現代への対抗的な生活文化であるともとらえられる。本共同研究のスタンスの一つをここにおきたい。

２　生活文化から描く社会教育の動態　―「生活卓球文化」への着目

では学習団体における独自の文化の生成あるいはその基盤を、どう読み解いていくことができるだろうか。

その際、本稿は「生活卓球文化」という用語の利用を試みている。「生活卓球」とは、先の田岡が最初に提起し、のちに会員たち自身も自分たちの言葉として用いるようになり、実際愛好会が発行する『会報』でよく登場する用語である。たとえば田岡は「メンバーは全部でましょう。そして一人でも多くの仲間と接触し、生活卓球の輪をひろげましょう。そのことが豊かな家族性を培い、母と子どもとの連帯性を躍動的な軸で貫くことになるのです。」[7] というような用い方をする。田岡自身が、「日常性」「ふだん着」ということを意識した学習実践、そこにおける人権的価値の実現を考え続けた実践論者であった。このことと「生活卓球」という用語を用いたことは無関係ではないだろう[8]。

一方、この用語に注目する本研究としての立ち位置についてはどうか。

「文化」について、民衆文化の創造を視野におく社会教育論の構築にとりくんだ北田耕也は、学習文化運動における組織や集団について「学習共同体」とよび、管理社会を増強する文化の「政治化」「商業化」を問題にしながら、「『学習共同体』の活動は、今確認したような支配的な大状況のもとで、それに抗しつつ、普遍的価値の探求と創造をめざすものである。それはまさに文化のたたかいである」「それは内なる闘争―たたかいが依拠する価値観や生活態度、さらには活動のすすめ方全般にわたる相互批判や再検討をも、常に同時にあわせもつ」[9] と指摘している。社会教育から文化に着目するにあたり、各々の文化活動そのものに意味はむろんであるが、文化にとりくむ個人による、社会に影響をうけて身に着けた価値観や生活態度の再検討、および社会の普遍的価値の対抗的な再創造に着目されているといえるだろう。

ここで「生活卓球文化」という場合も、団体において必然性をもって生み出されてきた独自の様式（たとえば団体の精神としての「８か条」から、親善大会のレベルにかかわらず誰もが楽しめる試合方式まで）に注目するとともに、その様式の創造に向き合ってきた人々の価値意識や生活態度までふくめて研究対象として注目することを意図している。そして両者を別々のものとしてとらえず、「様式」と「人々の価値・態度」の関連に目を向けていくことが一層重要であると考える。

この把握に基づき、本共同研究の各論を、生活態度と様式の対応関係において示してみよう。

【精神としての「８か条」とその具現化（江崎論文）】

〈生活態度・プロセス〉　　〈卓球・団体をめぐる様式〉

○卓球＋「権利意識」獲得のありかた　…自律的な組織運営（松永論文）

○卓球＋「平等に楽しむ」ありかた　…独自ルールに基づく親善大会（村上論文）

○卓球＋「話し合い」重視のありかた　…サークルの日常＆学習の様式（范論文）

○卓球＋「仲間づくり」重視のありかた　…延長上のボランティア活動（溝内論文）

○卓球＋「正しさの探求／向上」のありかた　…会員の練習風景（鎌田論文）

【生活卓球文化の創造の根底としてのケア（中山論文）】

ここで「卓球＋生活態度のありかた」には、様式が作り出されるプロセス自体を含んでいる。それゆえ、卓球・団体をめぐる様式も、できあがったもの・外からおろされてきたものではなく、団体独自に生み出し、また時代の中で試行錯誤しながら折々に生成してきた様式となる。話し合いや仲間づくりなど、人間関係へのフォーカスが目立つのは、団体自身のプロセス重視とも関係するだろう。

このように、本共同研究における「生活卓球文化」とは、卓球をめぐる「あらたな様式を生み出す活動プロセス」であり、成果としての「活動の新たな様式」と考えてみたい。この点は、われわれが描き出そうとする対象と視点の特徴を示すものともいえる。

3　研究対象：福岡市主婦卓球愛好会について

そこで今回われわれがとりあげるのが、校区公民館を中心的な活動場所として展開してきた卓球サークルの集合体、「福岡市主婦卓球愛好会」である。これまで50年にわたる歴史を持つ当団体は、多くの研究者にとりあげられてきた。故田岡鎮男や故御塚隆満など福岡市を代表する社会教育職員らがその生成過程に深く関与してきたこともあり、愛好会は公民館や職員との関与のもと、Sports for all にかかわる新たな公共的価値を生み出した社会教育関係団体として描かれてきた。上手下手や経験に左右されず誰もが楽しめるよう、愛好会独自ルールで実施する親善大会運営、スポーツ団体でありながら内部独立した学習団体「芝の会」をもつことなどは、特徴的な、他にあまり例をみないとりくみであろう。

特に今回の共同研究では、愛好会の「生活卓球文化」の創造に迫るうえで、彼女たちが向き合ってきた「家庭」や、彼女たちの卓球の基礎を支える「公民館サークル」の場に検討の焦点をおき、そこでの日常的な関係・暮らしのありように注目している。実際愛好会関連資料をたどっていくと、愛好会自身がそうした会員の日常基盤に、かなりの意識をはらってきたこともうかがえる。

(1) 生活とスポーツを結んで

福岡市主婦卓球愛好会は1971年に発足し、現在も活発にはや50年以上の歴史を刻む、校区公民館サークルを中心とした連合体である。愛好会は単なる連絡組織ではない。愛好会会員らが10年の歳月をかけて自分たちの思い・願いを言語化した「八か条」(1981) によれば、福岡市主婦卓球愛好会とは「誰からも強制されることなく目的をもち（第一条)、いつでも誰でも、上手下手なく楽しい仲間づくりを心がけ（第二条)、勝つことだけを目標とせず、上手になる為の努力もし（第三条)、技術の格差で人間の価値を判断することなく（第四条)、ひとりひとりの権利を認め思いやりを考え合うことの大切さを話し合い（第五条)、みんなで決めたことはみんなで守り（第六条)、協力して健康で明るいスポーツ活動を地域に広め（第七条)、人と人の結びつきが豊かに生きる喜びとなるよう（第八条)、心から願っているスポーツ団体です。」

だという[10)]。

のちに2020年に会報に記された八か条「解説」では、愛好会とは「主に公的な施設を利用して、継続的に卓球をしている主婦たちが生活とスポーツを結びつけながら、より豊かな人間関係を求めて自発的に活動しているグループの集まりです。」[11)] ともある。

「いつでも」「だれでも」「平等に」の理念を自ら掲げる愛好会は、複数の社会体育・社会教育の研究者たちが注目し、研究の遡上に乗せられてきた[12)]。愛好会はのちに内部に学習固有の場「芝の会」を生み出すが、この初代芝の会講師として活動し、愛好会の「系統的学習」の持続と成長を初期に支えたのが田岡鎮男であった点も注目されてきた。

こうした愛好会をわれわれがとらえる主な特徴には以下のような点がある。

・校区公民館サークルを基盤とした話し合いの重視

・団体のコアに学習の場を重視し生成し続ける　―リーダー研修会、のち芝の会＆月例研修会

・Sports for all の体現　―象徴としての親善大会

特に外部から注目されてきたのは３点目、誰もが平等に試合の機会を得られ、初心者でも楽しめる大会方式を開発し、チャンピオンスポーツとは真逆ながらレジャーとしてのスポーツとも異なる理念で運営される親善大会である。民主的スポーツを問い続けた愛好会において重要な側面である。

ただ初期の複数の『会報』にはこの親善大会において、会員が子ども連れでも参加できるよう「子ども係」を設け、いかに子ども連れでも楽しく参加できるかを大会運営の同等の問題として設定しているが、それを「子どもがうろついて試合がやりにくい」など疑問視する会員も多く、ともに母親としてどう考えるか話し合いを続けている様子が記されている。初代会長の前田恒子が「主婦のスポーツは生活と切り離してはありえないことを認識し、家族の応援を得ながら続けていくことが大切なのだと、卓球を通して知りました」[13)] と語る、まさに具体そのままである。

愛好会は会員である「主婦」たちの自立を支えていくが、その自立とは、単にものいう個人を育てるというものではない。話し合いや学習を通して、子どもや家族とともに生活を創る生活者としての自分へ、また仲間とともにあるサークルの一員へと、育てるものであろう。

(2) 2つの学習組織をもつ愛好会　―特に「リーダー研修会・月例研修会」と「芝の会」

愛好会では、卓球技術に関わる学習と、自己・社会にむきあう学習、この両輪で、学習の場が育まれてきた。愛好会をスポーツ組織のみならず学習組織としてみるとき、ここでは「リーダー研修会・月例研修会」と学習グループ「芝の会」に焦点化し、特徴を示しておきたい。

愛好会は、単なるお楽しみ卓球とは一線を画し、かつチャンピオンシップ的卓球とも異なる、一人一人が真摯に卓球技術向上に向き合うことをはぐくんできた。こうしたある意味特殊な位置づけをもつ団体において意識されてきたのは、リーダーの育成であった。

愛好会は1971年の発足当初から「リーダー研修会」を実施し愛好会の中核的担い手を育ててきた。リーダー論・卓球技術・議論の場が統合された密度の濃い内容構成である。リーダー研修会はその後消滅するが、前田恒子が1980年頃新たにたちあげた月１回の座学と実技の「月例研修会」はいまも継続されている[14)]。これらの研修会で特徴的なのは、徹底した議論の場が用意されてきたことである。それは当時の会員たちにとっては、以下各論文で示されるように、鮮烈に会員たちの生き方の転換を迫る体験であった。

そして、リーダー研修と技術研修が重ねて実施されてきたのは、愛好会のサークル観によるものだろう。話し合えるサークル、それを下支えするリーダー観である。そもそも愛好会は８か条の精神を中核に話し合いの場を重視してきた。「『卓球さえできればよい』という考えではグループは育ちません。前向きに考え、率直に話し合える集団は思いやる心を持っています。嬉しいことに、そうしたグループのリーダーが

この十年の間に多く育っているということです。」[15]。話し合いと一定の技術を持ち合わせるサークルづくりを通して、初めて卓球に触れる人へのアドバイスは、単位サークルで行うことを可能にしてきたのが愛好会であった。

一方、学習組織「芝の会」は愛好会のリーダー研修会と会員研修会ののち、もっと学習を続けたいという声を受け、1985年９月に有志により発足した。当時愛好会メンバーは「卓球を通して技術を追い求めることよりも、話し合い、考え合うことが必要だ」ということを意識し始めていたのだという。彼女たちには愛好会の学習領域の限界・単発性・内容の固定化を打破したい気持ちがあったともいう。「より広い長い目を育て」人間・女性の自立を目指して、田岡鎮男を初代講師として、芝の会は立ち上げられた。

毎月の活動の基本は、社会教育関係を専門とする講師と共に身近なテーマをとりあげ、講師・会員が思い思いに意見を述べ合う形で行われる。学習テーマは教育問題、女性問題、平和問題、人権問題と多岐にわたり、幅広く現代社会を生きる会員たちをめぐる、本質的な問題を生活の中の事象から学んできた。会員たちはなかでもそこでの語り合いの質を重視している。発足時から今日まで芝の会の活動に参加する中原圭子さんは「芝の会は平等かな。いろんな意見が聞けるし、誰かが正しいとか誰かが強いっていうのでもなさそうなので」とそれを表現している。それはある主張を基軸にした場ではなく、各々の生活感覚・生活態度を交わしあい考えあう場だからこそ実現している、場の文化であるだろう。

こうした場は参加者の日常を支えるとともに、ときには役員としての自由な意見交換の場にもなり、あるいは会を通して他の女性団体との接点が生まれるなど、芝の会メンバーにとってはもとより、主婦卓球愛好会本体においても大事な場として今日まで位置づいてきている[16]。

おわりに

最後に、本共同研究に共通する研究方法について記しておきたい。

われわれはまず研究方針の作成ならびに愛好会に関する基礎的な先行研究をレビューしたうえで、資料として50号に至る愛好会『会報』や芝の会会報『芝』、２種類の映像記録を中心に、共通して読み込みを行った。愛好会の基本資料となるこれらは、愛好会のご協力により、貸与いただいたものである。次いで、各自の関心に基づく検討の軸をたて共有するとともに、各自希望するインタビュー対象者をあげ、重なりに気を配りながら、インタビュー計画を作成した。これにもとづき、愛好会代表橋本太貴子さん・愛好会前代表ならびに芝の会代表の田中理恵子さんに数々のご協力をあおぎ、愛好会関係者８名・１団体（学習グループ芝の会）へのインタビューを行った。インタビューについては複数回お願いした方も少なくない。これに基づき個々人で分析・報告し、それについての共同検討を重ね、2023年９月の学会報告もふまえ、今回の各論考の執筆に至った。

調査だけでも約２年かけて行われた今回の共同研究には、福岡市主婦卓球愛好会皆様、ならびに卓球指導者皆様に多大なるご協力をいただいた。ここに厚く御礼申し上げる次第である。

【注】

１）*たとえば* Tony Jeffs and Mark k Smith（1996）*Informal education − conversation, democracy and learning*, Derby:Education Now など。

２）佐藤一子『現代社会教育学』東洋社出版社、2006年。

３）宮崎隆志他「限界状況における価値意識の再構成：地域健康学習における生命思想の生成に着目して」北海道大学社会教育研究室『社会教育研究第39号』2022年、２頁。

４）小林文人「はげまし学ぶ主事たちの動き―その苦闘と創造と―」小川利夫編『住民の学習権と社会教育の自由』勁草書房、1976年。

５）『ある公民館主事の実践』（信州白樺、1982年）、『かたすみの社会教育』（自費出版、1984年）、『さいはての社会教育』

（自費出版、1988年）

6）小川利夫「ある公民館主事の実践の思想と主体形成」『小川利夫著作集第三巻』1997年。なお（2）のここまでについては拙稿「公民館主事の専門性を追求し続けた孤高の精神（社会教育フロンティア21・田岡鎮男）」『月刊社会教育』第56巻第12号、国土社、2012年、62-65頁、を参照のこと。

7）福岡市主婦卓球愛好会『会報』2号より。

8）たとえば田岡は「対象者の生活の全面にわたって、多様な条件整備がすすめられていく過程で、人権・主権の本質的意義と価値が、具象を通じ人間関係を通じてきめこまかくコミュニケートされていくことになる。地域公民館が、対象住民の日常生活圏に定着する教育的意義がここにある」（田岡鎮男『ある公民館主事の実践』信州白樺、1982年、40頁）と、いかに生活場面のすみずみに目をくばるか、人々のコミュニケートのなかでいかに人権的価値を実現していくかを意識していた。

9）北田耕也『大衆文化を超えて―民衆文化の創造と社会教育』国土社、1986年、191頁。

10）福岡市主婦卓球愛好会「八か条」1981年制定。

11）福岡市主婦卓球愛好会『会報第48号』2020年。

12）たとえば社会体育分野からは、伊藤恵造「地域スポーツ組織の発展の「鍵」に関する研究：福岡市主婦卓球愛好会の事例」『日本体育大学研究紀要32号』2003年、伊藤恵造、森川貞夫、依田充代「スポーツ・フォア・オール」政策の比較研究（その3）総合型地域スポーツクラブの実証的研究―福岡市主婦卓球愛好会の事例」『日本体育大学体育研究所雑誌』28（1）2002年、社会教育分野からは相戸晴子「福岡市公民館における“主婦卓球愛好会”のサークル学習活動史」九州大学大学院人間環境学府社会教育思想論研究室『福岡市公民館史研究／社会教育思想研究第2号』2003年、など。

13）前田恒子「愛好会をふりかえって十年を語る」福岡市主婦卓球愛好会『会報10号』1981年。

14）小園江慶二さん（5章参照）が2023年まで長く講師をつとめてきたが、現在は次世代の技術指導者が担当し、座学も通して指導者自身の学びの場ともなっているという。

15）『会報10号（10周年記念誌）』。

16）芝の会の記載については、范嘉存（九州大学大学院）による調査レポート（2023.7）、ならびに現在芝の会講師をつとめる筆者の体験の裏付けに依るものである。